しのはら高校・死神委員会っ！！

彩暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
しのはら高校・死神委員会っ！！

【Ｎコード】
Ｎ５５３２Ｄ

【作者名】
彩暁

【あらすじ】
中学校音楽教師・畑山雄二は、突然訪ねてきた、「死神委員会」と名乗る過去の教え子６人組に命を狙われるハメになる。巨大な鎌を振り回しながら追いかけてくる高校生。雄二は逃げ切ることが出来るか？

FILE1：訪問者

私立篠原高校。表面上はそんな名前の高校。
死立屍ノ原高校。それがこの学校の本当の名前。
一見普通のこの高校の新入生が毎年めっちゃ少ないのは、理由があった。
入試の面接の時、あるチェックを極秘で行って、合格者を選ぶからである。
今年その特殊な入試に受かり、晴れてここに入学したのは、たった３人だった。

畑山雄二は、中学校の音楽教師だった。
今年４０歳になったが、見た目はそう老けていない。まぁ若い感じの先生だ。
今は7月。上旬なのにすっかり夏の陽気で、物凄くあつい。
職員室から一歩でると、一気に熱気が襲ってくる。
この日は、土曜日。吹奏楽部顧問である雄二は、職員室の自分の机で、楽譜をまとめていた。
部活があるといえども、運動部の先生はほぼみんな運動場やら体育館やらに行っているので、
今職員室にいるのは、雄二と、２人の先生だけだった。
現在時刻は９：００。１０：３０の合奏までまだ時間がある。
「楽器でも吹いてくるかな・・。」Ｍｙ楽器のケースを開けようとした。
と、職員室玄関の戸が開き、２人の訪問者がやってきた。

「失礼しますっ！しのはら高校1年の永戸ですが、遊びに来ました

！」
「失礼します。しのはら高校1年の湯川ですが、遊びに来ました。」
必要以上に元気な声と、低い声が続く。どちらも聞き覚えのある声だった。
「先生。お久しぶりです！」
この中学校を卒業した、元吹奏楽部員の元ＢＡＳＳ（バス）（低音）パート。
永戸亜紀（ながとあき）と、湯川里奈（ゆかわりな）だ。
ギシギシと音のする床の上を歩いて、近づいてくるその2人は、一見普通の女子高校生・・・
・・・・・・じゃなかった。
灰色のシャツに黒い大きなリボン。そして膝丈の黒チェックのスカート。黒のソックス。
その普通の（黒多いけど）制服に対して、明らかに異質なものが一つ。
その女子高生の背丈異常ある、鋭い大鎌だった。まるで死神のような・・。
「お前ら何持ってるんだ？それ本物？」
「やだなぁ先生。本物に決まってるじゃないですか。」
微笑みながら湯川が答える。
「銃刀法違反やぞ。そんなもの持ち込むな・・。」
「仕事道具だから仕方ないんですよ。国に許可は取ってます。」と湯川。
「凄いなお前らぁ！！」
「私達じゃなくて、学校が取ったんです。」と永戸。
この2人が入学したのは、入試がこの上なく難しいと噂の高校。私立篠原高校だ。
「さすが名門ってとこか・・。でもそれはしまっておいてくれ。怖いから。」
俺が言うと、2人はその大鎌をすばやく折りたたんだ。
「折りたためるのか・・。便利やな・・。」

軽く感心していると、すっかりコンパクトになった鎌を鞄にしまいながら永戸が口を開いた。
「今日は合奏あるんですか？先生。」
「あぁ。１０：３０からあるよ。見るか？」
「どうする里奈ぷー？」
「里奈ぷーって呼ぶな。お前は？見たい？」
「うん。」
「じゃあ見ようか。仕事はその後でも間に合うやろ。」
「わーぃ！先輩も呼ぶ？」
永戸が携帯を取り出す。
「先輩って・・・？」俺がそう聞くと、
「あれ？先生知ってるでしょう？相原先輩と長居先輩ですよ。」
知っている。現在篠原高校２年の男子２人。これまた吹奏楽部出身だ。
「あいつらか・・。」
「呼んでいいですか？」と湯川。
「どうぞ。」
「よし！里奈ぷー！メールしろ！」
「何で私？！お前携帯出してたじゃんさっき！そして里奈ぷーって呼ぶな！」
言いながら湯川は携帯を取り出してメールを打ち始める。結構な早さだ。
「すみませんねぇ。職員室内で。」
「いや大丈夫よ。」
「どうもです。お・・。送信完了・・。」
「早いな！！」
「あはは。」
最近の高校生はメール打ちがやたら早い。多分勉強より長い時間しているんだろう・・。
ちゃっちゃちゃっちゃちゃっちゃちゃーちゃー・・♪

明るいメロディーが流れる。
着メロだった。
「返信来ました。」
「早いな!着メロ・・変な曲やな。」
「失礼なこと言わないで下さい。お気に入りなので。あ、2人＋2人もうすぐ来るそうですよ。」
「ぷらす2人・・・・？」永戸が間の抜けた声を出した。
「3年生。」
「あぁ！」
「誰や？あと2人。」
なんとなく予想はつくんだけれど・・。
「北条先輩と桐原先輩です。」湯川が答える。
「やっぱり・・。」
これまた吹奏楽部出身の2人だ。ちなみに、北条は女子。桐原は男子だ。
「多いな。吹部出身。」
「でしょう。楽しいんですよ。委員会も6人同じなんです。」
「委員会入ってんのか？何委員会なん？さっきの『仕事』ってのもそれのか？」
俺が普通に質問すると、2人は顔を見合わせて、『どうする？』というような顔をした。
「・・・また後で教えますよ。」
突然、ただでさえ低めの湯川の声のトーンが更に落ちた。
なんかまずいこときいたのかな・・。と思ったが、気にしないようにした。
「じゃあ私達、バスパート見に行きますね。失礼しました。」
「合奏の時あいましょう！失礼しました。」
元気良くそういって、2人は職員室から出て行った。

FILE1：訪問者（後書き）

女子高生ぷらす大鎌。

ＦＩＬＥ２：死神委員会

合奏が始まった。
８月に行われるコンクールに向けて、まずは課題曲から。
指揮台に立つ俺の横には、６つの椅子に６人が座っている。
端から、永戸亜紀、湯川里奈、後から加わった男３人女子１人。
相原有也（あいはらゆうや）、長居謙太（ながいけんた）、
北条美樹（ほうじょうみき）、桐原尚人（きりはらなおと）だ。
おとなしく、静かに合奏を見学している。時々首をかしげながら。
だんだんまとまりつつあるコンクール曲。支部大会まで進めるといいんだけど・・。
課題曲を注意をいれながら徐々に合奏していく。
１時間くらいやってから、休憩をいれた。横の６人が、いきなり話し始めた。
「湯川。仕事ってこの後？」と相原。
「ああ。そうですね。ちょっと気が引けますけどね今回は・・。」と湯川。
「説明めんどいんやけどなぁ。」と長居。
「しゃーないですよ仕事だから。頑張って下さい。」と永戸。
「げ。また俺掃除か・・・。」と桐原。
「うちなんか記憶処理・・。」と北条。
説明・・？掃除・・？記憶処理・・？こいつらの『仕事』って一体・・？
と、少し気になってきたので、俺はもう一度きいてみることにした、
「なぁ。お前ら、何委員会なんや？何の仕事？」
「先生・・・。ききたいですか？」
ニヤリと笑って相原が言う。もちろん俺は知りたい。
「うん。」
「じゃあ教えます。僕らが入っているのは・・・・・・。」

微妙な間が空く。空気が緊迫する。
「死神委員会です。」
さらりと言った。
死神委員会・・。ああ。はいはい。死神委員会ね・・。死神って・・・
えぇ??
「えぇえ?!どんな委員会なんやそれは・・。」
「それはまた後でのお楽しみですよ先生♪」
陽気に永戸が言った。
まともそうではないのは確かだが・・。

合奏中はそれ（死神委員会）がとても気になった。
そのせいで1回指揮を振り間違えた。

合奏終了後、死神委員会の説明を受けた俺は、物凄くびっくりすることになる。
そして、死神たちとの長い長い追いかけっこが幕を開けてしまうのだ・・。

ＦＩＬＥ２：死神委員会（後書き）

一体どんな委員会なのやら・・・。

ＦＩＬＥ３：お仕事

部活終了後、音楽室で死神委員会のことをきくことになった。
『死神』という単語からして不吉だが、好奇心だけは人一倍ある俺が、
こんなに面白そうなネタを見逃すわけにはいかない。
「死神委員会説明会～ｆｏｒ畑山先生～を始めまぁっす！！」
「いえ～ぃ！」
俺は教師としてはこのテンションについていくべきなんだろうか。
「じゃあとりあえず死神委員会のこと、説明しますね。
まぁ先生にはどっちみち説明しないといけなかったんですけどね。」
相原が早口＆ノンブレスで一気に話す。
「何で俺に説明しないといけなかっ・・。」
「はいまずはメンバー構成と仕事内容いきますねー。」
人が話してる所を見事に割り込んで北条が言う。俺は一応お前らの恩師なんだが？
「メンバーは今ここにいる６人だけです。分かりやすいでしょう？」
さらっと湯川が言う。
「次は仕事内容ですね。・・まぁ、死神ってワードからなんとなく予想はつきませんか？」
なんとなく予想はつく。皆も予想はつくだろぅ？あれだよあれ・・。
「死んだ人の魂を迎えに来る？」
頭の中に浮かんだことをそのまま口に出してみた。
「そうです！」
６人が一気に言った。永戸・北条以外声は低め、もしくは低いので、なにやら威圧感。
「・・・そんなことできるんか・・？」
「出来ますよ。入試の時に、極秘適性検査が行われているんですか

ら。
　僕らは、それでちゃんと選ばれた、死神に適した生徒です。」
「まぁ、迎えにいく以外にも、『殺してくる』っていう仕事もあります。」
きらきらした目でこちらを見つめてくる生徒たち。でもすぐに信じられるわけがない。
中学（ココ）で、全く普通に（ちょっとテンション高いけど）過ごしていた、そして普通に思い出いっぱいで卒業していった教え子達が、高校生になって突然普通の人間でなくなったなんて。
死神になって、人の魂を狩っているなんて。
信じられるわけが無い。
「先生。絶対信じてないでしょう。」
桐原が苦笑しながら言葉を発する。
「でも本当なんですよ。信じてくれないと困ります。先生にも来てもらうんですから。」
「は？」
こいつ今なんていった？俺にも来てもらう、だと？
「先生にも来てもらいますよ。今日の私達の仕事は、畑山先生の魂を狩ること、ですから。」
「俺の魂を狩る？？！！」
まるで、友達と話しているかのようにさらりと言い放った湯川の言葉に、
俺は死ぬ程驚いた。そりゃそうだ。突然、自分の魂を狩るといわれたのだから。
「まてまてまて・・。つまり、何や、俺を殺すってことか？」
言うと、６人は一斉に頷いた。オーマイゴッド。
「てことで先生・・。今の状態では説明できるのはこれくらいですかねぇ・・。」
長居がほぼ無表情な声で言う。
「いや待って長居くん。役割説明しとこう。面白いから。」と言っ

たのは北条。
どうやら、ちゃんと役割分担はあるようだ。
「じゃぁうちから。死神1です！首切り役人です♪」『です♪』じゃねーよ永戸。
「まぁ要するに首切って持って帰る役です。で、私は、死神2。霊魂回収係・・。
魂切って、捕まえてつれて帰ります。」淡々と湯川。
「俺は死神3です。説明係です。」こちらも淡々と長居。
「俺は死神4で、死体処理です。解剖とか♪」嬉しそうに相原。
「俺が死神5。お掃除です。血とかの。」普通に桐原。
「で、私は死神6、目撃者の記憶削除をします。」可愛らしい声で北条。
な・・なんて適当なコードネーム・・。そしてなんで1年生が1・・・。
「上から、えらい順です。」
ひとの心を読んだかのように長居が言う。
「あ・そうなの？」
「私1番偉いんですよ（笑」
ごきげんで言ったのは北条だ。
「記憶削除能力は美樹が1番早くマスターしたんだからしかたないよ。」
「確かに・・。それ1番難しいから・・。」
「先輩。亜紀。もうそろそろ時間なくなってきましたよ。」
湯川が、桐原と永戸の会話をぴしっと切って、携帯電話で時間を確認する。
「あ、まじや。そろそろ仕事せんといかんかな。」
「先生。なんか言い残すことありますか？覚悟は決まりました？」
「は？」
「言い残すことありますか？」
「いや。大量に。つか、何する気だ。」

「殺す気です。」
「いやいや。そんなさらりと言わないで。俺生きたいんだけど。」
「え？俺逝きたい？」
「字が違う！」
「まぁまぁ落ち着いて。とりあえず逝って下さい。」
「だからさらりと言わないで！怖いよお前ら！」
死神１（永戸）から、まるで練習してたかのようにテンポよく言葉を発していく。
それに対してしっかり突っ込みをいれた俺のテンポ感覚。さすが音楽教師。
なんて逝っている・・違う。言っている場合じゃない。
「じゃ、永戸、湯川。第１段階よろしく。」　相原の指示。
「了解です。」
２人はそう言うと、鞄の口を空け、数時間前にも見たあの大鎌を取り出した。
刃が、禍々しい光を帯びている。
「じゃぁ先生行きますね。」
永戸は、自分の背丈ほどの大鎌をゆっくり振り上げる。その後ろで、永戸のそれよりかなり大きめの、高さ１８０ｃｍほどの巨大鎌を持った湯川がスタンバイ。
「ちょっと、おい。何をして・・。おいおいおい待て待て待・・。」
勢い良く鎌が振り下ろされた。

ＦＩＬＥ３：お仕事（後書き）

どうなる先生！

ＦＩＬＥ４：お仕事・２

右腕に向かってきた刃は、危うく直撃するところだった。

避けた。

ワイシャツの袖に鋭い切れ目が入る。

「危ないやないか！！何をしてるんだ！！」

本当に危なかった。思わず声を張り上げて怒鳴った。

「殺そうとしてるんですよ。仕事です。避けちゃ駄目じゃないですか・・・。」

そういう永戸の目は、普通の黒ではなかった。茶色でもない。

紫色。

冷たく、薄いのに、何故か深い光を放つ、紫色だった。

「先生はしぶといと思うよ。一筋縄ではいきそうにないかもね。」

鎌の柄で肩をトントンと叩きながら、湯川が言う。

湯川の目は、永戸とは違った。

灰色。

光の加減で銀にも見える、灰色。

あとの４人の目は、正常だった。仕事をする時だけかわるのだろうか。

また鎌が振り下ろされる。次もギリギリで避けた。

カーペット張りの床に刃が突き刺さる。

「２回目失敗・・・。」

「もう一回行け。永戸。あと２分。」

「はい。」
長居に言われ、永戸の鎌は、さっきより高く振り上げられた。
その時だった。
「畑山先生ぇ？お電話ですけど・・。」
国語担当の女教師が戸をあけて顔を出した。小さい目が大きく見開かれる。
「きゃぁあああぁぁぁ！！！！！！！！！」
物凄い悲鳴を上げ、「誰かぁっ！」と叫びながら逃げていった。
逃げるのかよ。

「あ～ぁ。誰かきちゃいそうですね。」ため息をつきながら相原。
「今日は引き上げよっか。」と北条。
「また今度リベンジですね。」と長居。
「じゃぁ、また来ます。先生。さようなら。」低い声で湯川。
「次は絶対殺しますからね！」もとのテンションで永戸。
「さようなら～。」桐原。
湯川が、二重になっている大きな窓を開ける。
何をしだすかと思うと、そこから北条と桐原が飛び降りた。
ここは音楽室。４階だ。
「おいっ！危なっ・・。」
後に続いて、長居、相原が飛び降りる。
呆然としていると、永戸が「さよならっ。」と言って飛び降りた。
いつの間にか鎌をしまっている。
最後に、湯川が「またお迎えにきますから。」と言って小さく手を振り、飛び降りていった。

そのあとすぐに、さっきの女教師が、体育教師の男をつれて助けに

来た。

おそいよ。

ＦＩＬＥ４：お仕事・２（後書き）

九死に一生

FILE5：リベンジ

数ヶ月の間に死神と化した教え子達に狙われるようになってから2週間。
あの後、窓から下をのぞいてみると、一瞬景色が歪んで見えた。
疲れていただけなのか、それか、死神達（あいつら）の学校への入り口なのか。
あんな恐ろしい体験をした後だから、当然のように毎晩夢に出てくる。
いつ殺しに来るやら分かったものではないので、周りに誰もいなければ、かなり神経を使う。

ちなみに今日も土曜日。
今日は、いつも通り原則午前中だけの練習なのだが、午後残る生徒が多いので、
午前中は合奏、そして午後は残って練習している生徒の個人レッスンを予定している。
さすがに死神も、自分の後輩の目の前で先生を殺すことはできないだろう。
「ま、あいつらならやりかねないけど・・・。」
「なにがですか？」
隣にいたクラリネットパートの女子生徒が首をかしげる。
そういえば、楽器の修理の途中だったことを思い出した。
「あ、いや。なんでもない。・・一応直ったけど、次楽器屋さん来た時に1回見てもらえ。」
「はい。ありがとうございました。」
安心したように息を吐いて、女子生徒は楽器を受け取って職員室から出て行った。

肩がこる。気の張りすぎだろうか。

「いたたたた・・。湿布張ってくればよかった・・。」
「何言ってるんですか先生。死んだほうが楽ですって。」
「あぁ。そうかもなぁ。痛みも感じないかも。」
「でしょう？じゃあ潔く、魂下さい♪」
肩を棒のようなものグリグリと押される。
こっているから丁度いい・・。というか、
「おい。」
「はい？」
「『はい？』じゃない。何しに来たんだ？」
「殺しに来ました。」
「丁重にお断りします。帰ってもらえるかな？」
「えー。じゃあ、魂とりにきました。」
「同じだ。頼むから帰ってください。」
背後にいたのは、２週間前と同じ格好をした、同じコンビ。
永戸亜紀と湯川里奈は、でかい鎌の柄で俺の肩を押していた。
警戒していた、のに来てしまった。

死神、再び。

「帰りませんよぉ。リベンジですから♪」
「俺はまだ死ぬ気はないぞ。一応言うけど。」
「大丈夫。死んでも教師は続けられますから！」
「わけ分からん！嫌だ！俺はまだ生きるからな！」
職員室には・・只今俺とこいつらしかいない状態だ。
超ＢＡＤ　ＴＩＭＩＮＧ。

とりあえず逃げることにした俺は、フルート、総譜（スコア）、指揮棒（タクト）など、
合奏に必要なものを一通り持って職員室を出た。
「あっ。待ってくださいよ！」

「待たない！」
早足、ときには走って音楽室へ。
着いたときにはもう息切れしていた。もう４０だからな。
戸に鍵をかける。同時に永戸が戸を開けようとしたが、こっちの方が一瞬早かった。
「あれ？閉められてる。」
「まじで？先生！開けてください！」
「誰があけるかっ！！」

想像してみよう。
灰色のシャツ、黒のリボン、黒の膝丈スカート、黒の靴下。
それに、背丈を越す大鎌を持った女子高校生が追いかけてくる。
戸を開けたら確実に殺される。
あなたは戸を開けますか？開けねぇよな。

息切れもましになってきた。
２人の声は聞こえず、近くでトランペット、遠くから色々な楽器の音が聞こえてくる。
「帰ったかな・・？」
「帰らないって言ったじゃないですか。」
真後ろで低い声が聞こえた。湯川だ。
「うわぁあぁぁ！！いつ入ってきた！！？」
「さっきですけど。」
「普通に言うな！どうやって入ってきた！」
「それは言えませんねぇ。」
どうやって入ってきたのかは分からないが、多分瞬間移動か何かだろう。
何と言っても、普通の人間ではないからな。何でもアリか。
「リベーンジ！！ぃえぇ～ぃ！じゃぁ先生逝きますよ！」
「待て待て永戸ぉ！まだ死にたくないって！」

これだけ大騒ぎしていて、誰一人生徒は助けに来ない。
薄情者めっ！
「お願いですよ先生ぇ！今の音楽の先生８０歳なんです！
もう死んでるのにもう一回死にそうなくらいヨボいんですよ！うちで先生してください！」
「ヨボいってなんじゃぁ！わけわからん！」
「ヨボヨボって意味です。」
「そこはこたえんでええわ！」
「まじお願いしますっ！音楽の先生してくださいうちで！」
「何で死ぬ必要があるんだよ！」
「指令状にかいてあるので。ほら。」
黒い紙をひらひらと動かす湯川。
「いや、こんなとこでお前冷静やな！」
永戸は狭い室内でずっと鎌を振り回している。大変危険です。近づかないで下さい。
「もー・・。先生男らしく無いですね。まぁいいです。そんなに嫌なら。」
湯川の淡々とした口調。
「え？」
「亜紀、止まれ。」
「えー。せっかくチャンスなのに。」
「えー。じゃない。どうしても嫌がってたら、どうするんだった？」
「え。なになに？俺死ななくてもいいの？」
「いやいや。とりあえずです。どうするんやった？亜紀。」
「うーんと・・。峰打ちで気絶させる！」
「正解。いけ。」
「りょっうか～い♪」
「え。気絶って・・ぐっ・・！！」
ごんっ

勢い良く鎌の柄で頭を殴られる。

情けないことに、俺はそれだけで気を失ってしまった。

FILE5：リベンジ（後書き）

がんばれ先生！

FILE6：しのはら高校

目が覚めると、青空が広がっていた。
ゆっくり起き上がると、パラパラと土の音がした。
だだっ広い運動場だった。
向こうに少し古びた校舎が見える。が、雄二の中学校ではなかった。
全ての部屋のカーテンが閉まっている。ちなみに、真っ黒。カーテンというより暗幕だ。
暗幕が閉まっている以外、なんの変哲もない、ただの学校だった。
「どこだここ・・・・。」
辺りは静まり返っていて、人影は見えない。
「あいつらどこ行った・・・？」
さっき俺の頭を思いっきり殴りやがった2人までも、いない。
さすがに不気味になってきたので、得意の大声を出して人を呼ぶことにした。
「おぉーい！！誰かいないのか！？」
叫びながら、少し校舎に近づいてみる。見た目は普通の学校だ。
しかし、どことなく不思議な雰囲気だ。
空は青い。太陽も元気に光っている。
明るい風景の中で、1つだけ異質なその校舎。
「ここはどこだ・・。本当に・・。永戸ぉっ！！湯川ぁっ！！」

―やぁ、お目覚めかい？畑山先生。―

紳士的な男の声。
「誰だ？！」

―怖がらなくていい。怪しいものではない。―

充分怪しいよ。

―さて、そこは暑いだろう。とりあえず校長室においで。―

気付くと、汗だくだった。ぬれたシャツが体に張り付いている。

「なんなんだ。ここはどこなんだ？篠原高校か？」

―そうさ。ここは篠原高校だ。―

とりあえず、校舎の中に入ろうと、一歩踏み出した。

―あぁ駄目だ。そのままで入るのは止めたほうがいい。―

「どうしてだ。」

―君には霊力はない。しかも人間だ。そのまま進めば、
結界によって君の体は塵にされ、魂も消滅する。―

「おいおい・・。物騒だな。早めに言ってくれよ。」

―ははは。ちょっと待ってくれ。君の体にも結界を張ろう。―

数十秒後、指先に違和感を覚えた。まるで水に手を浸しているような・・・。

その感覚は、指先から腕へ、肩へ、胴体から頭と下半身へゆっくり広がっていく。

俺の体は、輪郭を縁取るように、淡い銀色に輝いている。

今気付いたが、靴を履いていなかった。殴られたのは室内だったからな。

「なんだこりゃ・・・？」

―それが結界さ。それでもう大丈夫。さぁ、おいで。―

「本当にこれで平気なんだろうな。」

―あぁ。保障しよう。―

本当に大丈夫かよ。と思いながら、一歩ずつゆっくり校舎に近づく。
3メートルほど進んだところで、爪先がひんやりした空気に触れた。
悪寒を感じて、足が止まった。

―どうした？進みなさい。―

額に冷や汗が流れる。この中には確実に、なにかいる。
人間ではない。ましてや死神でもない。なにか不吉なものが、確かに、いる。

―何か感じるか？それはそうだろうな。実際この中には、人間でないものがいるのだから。―

「何がいるんだ？」　　体の震えが止まらない。

―ふふ・・。来てからのお楽しみさ。―

ゴクリと唾を飲み込む。流れる冷や汗を拭う。
深呼吸をすると、体の震えが少しばかり治まった。

―さぁ、お進み。―

俺は黙ってゆっくり歩き出した。

ＦＩＬＥ６：しのはら高校（後書き）

不思議高校にようこそ。

FILE7：ご案内

校舎の中は、薄暗く、空気はひんやりとしていた。
今は1階にいるのだが、上の階から沢山の声が聞こえる。
「なんだ。一応生徒はいるみたいだな。」
―当たり前さ。学校なんだからな。―
「まぁな。で、校長室はどこだ？」
―ああ。そうか。まだ案内していなかったな。ちょっと待ってくれ。―
「あ・・・ああ。」

遠くから聞こえる話し声。
壁には何の掲示物もない。
下駄箱にも、両手で数え切れるくらいしか靴がない。
人の姿は全く見えない。
「なんだこの学校・・・。」
昼間なのに薄暗い。不気味でしょうがない。
「気味悪いなぁ・・・。おーい・・・。まだかー・・・？」

「お待たせしました。」

背後から声がした。

見覚えのある制服の2人組。　　・・・・永戸&湯川じゃないぞ。

北条&桐原だった。

「お前ら・・・・。」

「あ、心配しないで下さい。私達は殺す役じゃないので。」

こちらです。と手招きをする。

黙って付いて行く。

廊下は異常に長い。なかなか端まで辿りつかない。

二人の後姿を見つめながら付いて行くうちに、ふと思った。

二人が背後に来た時、俺は、声をかけられるまで全く気付きはしなかった。

音楽で鍛えられた聴力でさえも、二人の足音を捕らえることができなかった。

しかも

俺は、玄関に居た。

後ろには、扉はおろか、背後にまわれるような状態もなかった。
どうやって二人は、背後にまわったのだろうか。

『それはいえませんねぇ。』

大鎌を持って背後に立つ湯川。

あいつも同じ方法で移動したのだろう。

「本当に人間じゃないんだな・・・。」

「なんか言いました？」

「ぅ、いや。なんでもない。」

「そうですか。着きましたよ。」

桐原が指差した方向に、「校長室」と書かれた黒いプレートがあった。

「ここか・・・。」

北条が一歩前へ進み出る。戸を軽くノックした。

「3年髑髏（ドクロ）組、北条・桐原です。先生を連れてきました。」

「ご苦労様。お入り。」

中から紳士的な声が聞こえる。

「先生。入りましょう。」

桐原に背を押される。

北条の手で、戸が開けられる。

俺は一歩踏み出し、「校長室」に入室した。

FILE7：ご案内（後書き）

怪しいぞ校長先生。

ＦＩＬＥ８：校長室にて

校長室の中は、廊下の薄暗さとうってかわり、とても明るかった。

「やぁ、はじめまして畑山先生。」

前方の、高級そうな椅子に腰掛けた男が言った。どうやら校長のようだ。

男の両隣には、俺の命を狙う恐ろしいテロリスト残り４人が並んで立っている。

男は、見た目的にかなり若かった。　どう見ても２０歳前後だ。

漆黒の、少し長めの髪。深く澄んだ大きな目。線の細い体の輪郭。美しい青年だ。そして、容姿に対し、ギャップを感じさせる大人びた声。

「君に、少し話があってね。少々手荒だったが、来てもらったんだ。」

目線を上げると、永戸と目が合った。永戸は軽く頭を下げる。

「話ってのは、なんなんだ？」

「いや、なに。君に忠告をしておきたいと思ってね。」

そういうと、校長は机の引き出しから、大きな赤い水晶玉のような

ものを取り出した。

「おいで。この上に左手をかざしてごらん。」

手招きをする。言われるがままに近づき、水晶に手をかざした。

〔ザァァァァ・・・・・・・・・・〕

テレビの、「砂嵐」のような音。

「なんだ・・・？」

〔パァァンッッ！！〕

突然水晶玉が割れる。破片が飛び散った。

「うわぁぁっ！！！」

俺はかなり驚いて、叫び声をあげたのに、あとの7人は表情ひとつ変えない。

相原の頬からは、飛び散った破片がかすったのだろう、赤い血の線が走っている。

それでも睫毛(まつげ)一つ動かさない。

「やっぱり・・・。」

声を上げたのは長居だった。

「あぁ・・・。思ったよりかなりひどいな。」

いつものテンションとは違う、相原の声が返事をした。

「なんなんだよこれ・・・。びっくりした・・・。」

心臓がバクバクいっている。予告なしでいきなり割れたからな。

「今割れたこれは、『霊玉(れいぎょく)』。魂の力をはかる石だ。
力の大きさは、音と色で判断する。強ければ強いほど、濃い赤となるんだ。」

校長が説明した。

「はぁ・・・。で、俺のはどうなんだ？というか、なんで測ったんだ。」

「いいかい先生。本来なら、音が少し鳴り、色が変わるだけなんだ。
でも、君の場合、玉が砕け散った。」

「あぁ。すごくびっくりした。・・それで？」

「これは、君が異常なほどの力を秘めていることを示している。」

よく理解が出来ない。
力があったのなら、体中に結界を張らなくても校舎に入れたんじゃないのか？

「念のためさ。力がなかったらどうする？」

「あぁ・・まぁそれは危ないか。で、俺の力がどうしたんだ？」

「実はな・・・・。」

この後、４０歳現在にして今までで１番おれは驚くことになる・・・。

ＦＩＬＥ８：校長室にて（後書き）

先生の中に秘められた力とは・・・？

FILE9：能力

「このまま生きていれば、君は危険にさらされることになる。」

最初の言葉はそれだった。

「は・・・？」

それだけで理解できるかってんだ。

「いや・・・なんでそうなるのか説明してもらわないと分からないんだけど・・・。」

「あぁ。そうだろうな。じゃあ長居くん。頼むよ。」

校長に指名された長居は、細い目を一瞬少し見開き、一歩前へ進み出た。

「かしこまりました。」

その後の説明は、以下のようなものだった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

1．さっき確かめた通り、俺は並外れた霊力を持っているらしい。
2．しかし、俺自身はその力をコントロールする力がない。
3．並外れのこの霊力は、世界に色んな影響をおよぼす。

＊色んな影響・例＊

・周りにいる浮遊霊などに極端な能力を与える。
（悪霊などに変化させてしまう可能性あり。）
・世界を逆転させる。（これについては俺もよく意味が分からない）
などだ。

これはかなり簡素化させたもので、実際に聞いた長居の説明は８割方ちんぷんかんぷんだった。

簡素化しても、「世界を逆転させる。」というのは全く意味がわからない。

みんながみんな逆立ちして暮らし始めるとでもいうのか。

そんなわけない。こえーだろそれは。

「・・・というわけですが、何か質問はありますか？」

大ありだ。

「なんでしょう？」

「あの・・・最後の、世界を逆転させるってのはなんなんだ？」

「あぁ、それですか。つまり・・・。」

一瞬の沈黙。躊躇（ためら）いがちに長居が口を開く。

「私達の住むあの世界と、霊たちの住む世界が逆になる、といえばいいでしょうか。」

「あの世界・・？この世界じゃないのか？」

「ええ。この学校は、人の住む世界と霊の住む世界の間にある世界ですから。」

「よくわからないが・・・。逆になるっていうのは、なんだ？
人間とかが、霊の世界で暮らすことになるっていうことか？」

「そうです。人や動植物は霊の世界で暮らし、霊は人の世界で暮らします。」

「別に問題ないんじゃないのか？そこに慣れればいいんだから。」

「何言ってるんですか。問題ありますよ。」

「・・・どんな？」

「いいですか先生。生と死は全く矛盾しています。当然生きているものと死んでいるものも。
住む世界も性質もまったく違う・・・。霊のすむ世界には、酸素はありません。
霊は、酸素の変わりに瘴気を吸います。だから、霊の世界は瘴気だらけです。
人間が瘴気を吸うとどうなると思いますか？死んでしまうんです。
その逆に、霊も酸素を吸えません。死んでしまいます。」

「でも、今人間世界にいる浮遊霊とかはなんなんだ？」

「あれはこの世に対する未練で、特殊な力を持つ霊ですから例外で

す。
　でも、世界が逆転すれば人への未練も断ち切れ、普通の霊に戻るでしょう。」
「じゃあ、霊って、既に死んでるんじゃあないのか？」
「そうですよ。一度死んだものがもう一度死ぬイコール消滅するということです。」
「消滅？」
「そうです。世界が逆転すると、人は死ぬ、そして霊になり、消滅する。」
「世界から何もいなくなる・・ってことか？」
「そういうことです。」
現実味は一切ないが、多分大変なことなんだということはよく分かる。
ただ、なんで今更そんな大変なことに気付いたのかということだ。
「決まってます。今まで埋もれていたんですよ。先生の力が。」
そう返したのは相原だった。
「４０になった今、突然姿をあらわしたんです。微妙に進化しながら、ね・・・。」

付け加える。低い声が、静かな部屋の空気を軽く振動させる。
校長がじわじわと立ち上がった。
「・・・君の存在は、世界に対する大きな脅威となるんだ。」
「はぁ・・・。」
「1番いいのは、君の力をこの中間の世界で制御し続けることだ。
ただ、それには、魂を直接制御する必要がある。つまり死んでもらわないといけない。」
「はぁ・・・。」
「それだけだ。考えてくれるかな?世界と、そして、君自身のことについてもね。」
「んなこと言われても・・・。死ななくていい方法とかないのか?」
「あるが、その方法はあまりに危険だ。結局死んでしまうことになるだろうな。」
どっちにしろ死ねということか。
困ったことだ。
「嫌だよ。死んだら何もかも捨てないといけなくなってしまうだろう??」
「ああ。もちろん。だけど、音楽と人間関係はこちらで保障できる。

」

そういって校長は横に並んだ6人の死神の肩を一人ずつ叩いていく。

「この子達じゃ、不服かね？」

「いや。不服じゃないが・・・家族や、向こうの友達や生徒はどうするんだ。」

「それはどうにもできない。しかし様子を見ることは、霊玉で出来る。」

それはさっき砕け散ったじゃねえか。いつの間にか掃除されてるし。

「桐原君はお掃除担当だからね。やってくれたんだ。」

「そういえばそんなこと言ってたな・・・。」

あのいまいましい恐ろしい記憶がよみがえる。ん？

「おいまて。今何時だ？もとの世界は。」

「時間かい？もとの世界は・・・2時だな。」

「今すぐ帰らせてくれ。多分生徒が俺を探してる。」

「そうか？じゃあ、どうするかを考えておいてくれ。」

案外簡単に帰してくれるようになったらしい。

「あ・・・ああ。考える。」

「よろしくたのむよ。いい返事がもらえると嬉しいな。」

そういうと、校長はくるりと背を向け、手だけで湯川に指示をする。

すると、一瞬のうちに、そう、一瞬のうちに湯川は俺の背後に回っていた。

「また・・・・・・。」　驚きで言葉が出ない。

「先生、少々失礼します。」

ゴンッ

次は素手で思い切り殴られた。

前回同様、気を失ってしまったのはいうまでもない。

FILE9：能力（後書き）

なぜか先生の思考回路が若い。

FILE10：その頃、音楽室

「ねえ、いた？」

「ううん。職員室にも音楽室にもいないよ。」

「私も学校中探したけど、どこにもいなかったよ。」

「どこ行っちゃったんだろ・・・。午後イチでレッスンしてくれるって言ってたのに。」

雄二が篠原高校（屍ノ原高校）で妙な目に会っている間、姿を消した雄二を生徒は

心配して、探していた。

「さっきまで音楽室にいたみたいだよ？」

「おかしいなあ・・・。」

会話をしているのは、トランペットパート2年生二人と、ホルンパートの2年生二人だ。

原則、練習があったのは午前中だけだったのだが、コンクールが近づくと、

希望者は弁当を持参し、午後からも練習するのを許されている。

トランペットの2年生である岡本春香は、午後最初に雄二の個人レ

ッスンを受ける予定だった。

しかし、予定の時間を過ぎても雄二が姿を見せないため、自ら呼びに行った。

最初は一人で、そのうち、気にかけて一緒に探し始めたのが三人。

音楽室には始め鍵がかけられていて（死神を避けるため雄二がかけた時のもの）、

公務員のおじさんに合鍵で開けてもらうと、床に雄二が落としたであろう楽譜と、指揮棒が

散らばっていた。

それでますます心配になった四人は他の先生に、見かけなかったかと尋ねた。

返ってくるのは、「見なかった。」という言葉だけだった。

一人だけ、「高校生二人と一緒に早足で音楽室に向かって行ったのを見た。」という人が

いたが、音楽室には誰も居なかった。

時間が過ぎていく。練習をしないといけないので、三人は各自の練習場所に戻っていった。

「ほんとにどこ行っちゃたんだろ・・・。」

春香は溜息をこぼしながら、床に散らばった楽譜をまとめて、並べる。

その時、一枚の楽譜が真っ二つに切られているのに気付いた。

永戸が振り回した鋭い鎌が当たって切れたものだ。

切り口には、乾いた赤黒い血のようなものが付着していた。鎌についていた人の血だ。

「何、これ・・・・。」

寒気がした。真夏なのに、腕に鳥肌が立つ。

口の中に溜まった唾を飲み込み、あとの楽譜を全て拾う。

数枚、何かが突き刺さったような穴や、切れ目があった。

「嘘・・・・。」

そうつぶやいたすぐ後、突然音楽室の戸が開けられた。春香が驚いて体を強張らせる。

「何やってんだ?」

FILE11：生徒

戸を開けたのは、雄二だった。

「先生っ！！？」

「はい。先生ですが何か。」

「ど・・・どこ行ってたんですか！？探したんですよ！！」

「あ・・いや、ちょっと急用で・・・・。」

雄二が春香に視線を向ける。生徒の手に握られた、真っ二つの楽譜が目に入った。

「とりあえず、その楽譜返してくれるか？」

さりげなく楽譜を取りかえすつもりだった。

しかし、手を差し出すと、春香は後ろに少し下がって、楽譜を渡そうとはしなかった。

「先生。これ・・何があったんですか。」

真っ二つになった楽譜を雄二の目の前に掲げて、質問する。

「いや・・・カッターでさ、間違えて切ってしまって・・・。」

「間違えただけでこんなに真っ二つになるんですか？それに・・・

この血も・・・・。」

春香が切れ目に付着した乾いた血を指差す。今始めて気付いた雄二はぎょっとした。

「それは・・・赤鉛筆とかじゃないか??」

絶対通じるわけのないデマカセを言う。春香がきつい目で雄二を見据えた。

「そんなわけないじゃないですか！コレは血ですよ！一体何があったんです！？」

春香はまた雄二の目の前に楽譜を近づける。かなりの威圧感だ。

あまり話をしていないが、もうこれ以上ごまかせない気がした。

白状したほうがいいのかもしれないと思った。

「・・・・・誰にも言わないと、約束しろ。」

雄二の口から発せられた声は、本人すらびっくりするほど凄みのきいた声だった。

春香は、一瞬ビクッとして目を見開き、そして、ゆっくりと頷いた。

今になって気付いた全開のドアを閉めて、用心のためカギをかける。

雄二は春香に、椅子に座るよう促した。そして間をおいて口を開く。

「お前、死神って信じるか？」

「は？」

当然春香はぽかんとする。雄二も、言ってから少し恥ずかしくなった。

「死神って・・・。魂を狩るとか、死者のお迎えに来るとか言われてる死神ですか？」

「ああ。」

また春香が理解できないというような顔で雄二を見つめる。

とりあえず、さっさと説明を終わらせようと思ったので、続けた。

「その、死神がな、お前も知ってるやつなんだけど、なんというかな・・・。

あのな、その死神が、俺を殺しに来て、俺は逃げてて・・・。」

春香の表情はどんどん変な人を見る目に変わっていく。

おそらく、突然空想のような話を始めた自分の顧問の思考回路を心配しているだろう。

「あの・・・先生。私は何があったかききたいのであって、空想のお話は・・・。」

「空想じゃないんだって、本当に。お願いだからこれから話すことは信じてくれ。」

春香が軽く眉間にしわをよせながらも頷いたので、雄二はしのはら高校のことから今までの出来事、そして今日の自分の体験を出来るだけわかりやすく説明した。

理解してくれないかと思ったが、意外と春香はしっかり理解したようだ。

「そんな・・・先生が先輩に殺されるなんて、絶対いやなんですが・・・。」

「でも、この世を救うためには俺が死なないといけないんだそうだ。」

「世界をとるか、自分をとるか・・・・・ですか。」

「あぁ。」

「なるほど・・・。」

春香は細い指で困ったように頭を軽く掻く。

しばらく沈黙が訪れた。

お互い何か言葉をさがしているのがよくわかった。

「「じゃあ」」

同時に同じ言葉を発する。もちろんまた数秒の沈黙があった。

「先にどうぞ。」

「いや、お前から言え。」

「いえ。先生から言ってください。」

「じゃあ言うぞ。きりなさそうだから。
お前が関わると、下手すればとばっちりに会うかもしれない。だから・・・。」

「関わるな。ってことですか？いやですよ。」

春香ははっきりと言い放つ。雄二は困惑した。

「そんなことといわれてもな・・・。あぶないことは事実だしな・・・。」

「でも相手は私たちの先輩です。
それに、先輩たちが、3年間世話になった先生を殺すことに抵抗がないのかも疑問です。」

「世界が危ないからじゃないのか？」

「それにしても、そんなに楽しそうに殺そうとするなんておかしいじゃないですか。」

雄二の頭の中で、春香のその疑問が何度も響く。確かにそうかもしれない。

『もう一回死にそうなくらいヨボいんですよ！！』

（いや、音楽の先生が老人であることだけであんなにはならない・・・。

もしかして俺、嫌われてる？）

勝手に想像して少し悲しくなる。

「先輩たちは先生大好きだったじゃないですか。なんか怪しいですよね。その高校。」

「まぁ、な・・・。」

「じゃあ調べてみましょうよ。」

「え。いや、お前、関わるなって・・・。」

「いーえ。きいたからには思い切り首突っ込んでやりますよ。足手まといにはなりません。」

春香は毅然とした表情で言う。有無を言わさないような、厳しい光を目に宿している。

またしばらくの沈黙。雄二は、どうすればいいのかわからなくなっていた。

このあきらめの悪そうな生徒をどうやって関わらないようにするか考えていると、

春香はスッと立ち上がった。そしてニッと笑う。

「じゃ、今日家で早速調べてみますね。しのはら高校。」

「えぇっ！ちょっと待っ・・・。」

「失礼しましたー！！」

雄二が、『関わるな』と言う前に、春香は音楽室から走って遠ざかっていった。

「おいおい・・・・。」

こうして、しのはら（屍ノ原）高校に関わってしまう一般人が一人現れてしまった。

ＦＩＬＥ１１：生徒（後書き）

春香ちゃんは好奇心旺盛なのです。

FILE12：記憶

春香は、自分の部屋でパソコンのキーボードを叩いていた。
雄二にきいた、しのはら高校について調べているのだ。
手をせわしく動かしながら、何か情報はないかと探しているが、大した情報は見つからない。
「もぉー・・・。なんかないのー？」
ぼやきながら青いふちのメガネを押し上げる。
パスワードを変えたりしてあきらめずに探し続けると、ひとつ、気になるサイトがあった。
青色の文字で書かれた、『愛莉のぶろぐ』というサイト名の下の、黒い文字の文の中に・・。
『私立篠原高校。実際は名前ちょっと違うらしいのねー。なんか確か、他の漢字で・・。』
と続いている。
春香はそれをダブルクリックした。ページは、それを待っていたように、早く開いた。
ブログの題名の中を探し、『入試の記憶がない！』という題名をクリックした。
赤や黄色の文字で派手に彩られた文章に、目を通す。

「これは―・・・・・。」

―学校

「先生ぇえ～・・・・・。」

翌日。春香は職員室に入ってくるなりこのテンションで話しかけてきた。

「なんだお前・・・。なに疲れきってんだ。」

「昨日しのはら高校のこと調べてみたんですよ～。」

「なにか分かったのか？」

「ええ、ひとつだけ興味深いことが。」

ずいぶんと情報をみつけるのが早い。大したものだ。

「どんな？」

俺がそう問うと、春香は少し下がったメガネを指で押し上げ、言う。

「あの高校を受けた人たち・・。みんな、面接の記憶がないんだそうです。」

「は・・・・。面接がないとかじゃないのか？」

「それがですね・・。面接を受けるため、部屋に入るまでのことは覚えてるらしいんです。」

「つまり・・部屋に入ってからの記憶のみなくなっている、ということか。」

「ええ。そのようです。」

もしかして、あの校長か教師が、受験者の記憶を消しているんだろうか・・。

しかし、そんなことが可能なのか？

でも、確か美樹は『記憶処理』とかいう力があったはず・・・・。

「あいつが何か教えてくれるかもしれない・・・・。」

「心当たりがあるんですか？！」

「ああ。確かじゃないがな。よし、それをもう少し調べてみるか。」

ということで、俺たちは、しのはら高校の怪しい入試方法について調べることにした。

どちらかというと、俺が死ぬか死なないかということの方が気になるが、

あの高校がなんか怪しいことに変わりはない。

調べてみるに越したことはないだろう。

「お前、あいつらの中で誰かのメールアドレスしらないか？」

「えぇっと・・・。湯川先輩と北条先輩なら。」

「じゃあ、連絡取ってくれるか？暇があったらここに来るように。」

「はい。じゃあ家に帰ったらメールしておきますね。」

「ありがとう。じゃあ、もう練習行け。」

そういうと、春香はうなずいて職員室から出て行った。

さてと・・どう聞き出すか。

FILE13：美樹

「先生のほうから呼んでもらえるなんて、光栄です。」

ピンク色の花びらをぱっと散らしたような笑顔で美樹はいった。

椅子に座ってまっすぐにこちらの目を覗き込んできた。

「ちょっと聞きたいことがあったもんでな。」

あのあと、春香にメールで連絡をとってもらい、美樹をよんだ。

里奈（湯川）にも連絡してもらったが、「充電中」（ってなんだ？）で来れないらしい。

「里奈にもいろいろききたかったんだけどなあ・・・。」

「おや。いつから里奈ちゃんのこと呼び捨てにするようになったんですか？」

里奈のみならず、もう全員呼び捨てにしようかとか思っているんだが。

美樹は、いつもはおろしている長い黒髪を耳より上で二つにしばっていた。

すこしばかりか、幼く見えた。

普通の高校に行けばモテていたはずなのに、もったいないことを・・・。

「先生？」

ツインテールを小さく揺らして美樹は首をかしげた。
俺は脱線した思考回路をもとに戻す。
えーと・・・・何をききたかったんだっけ。
あ、そうだ。
「お前、面接試験の記憶ある？」
「はいぃ？」
単刀直入にした俺の質問に、美樹はまたツインテールを揺らして返事した。
「面接の記憶、ですか？なんでそんなこと聞くんです？」
「それがな・・・・。」
俺は、春香が印刷してきてくれた「愛莉のぶろぐ」の文を読み上げた。
完全に女子高校生の軽い言葉遣いばかりだったので、読むのは気恥ずかしかった。
「・・・ということだ。」
「へぇえー・・。」
美樹は興味深そうにうなずく。
しらなかったようだ。

「それで・・・合格者はどうなのか、ってことですか。」

「ん？ああ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

しばらく沈黙が訪れた。

美樹の微笑みが、沈黙をさえぎる。

「私なら、ありますよ。記憶。」

思いがけないひとことだった。

「本当か？」

「ええ。しーっかり残ってます。」

そういいながら右手の人差し指でこめかみのあたりをトントンとつつく。

そしてまたにっこり微笑んだ。本当に愛らしい笑顔だ。

俺は美樹にそのことをもっと詳しくきくため、口を開こうとした。

その瞬間、美樹は、今まで自分のこめかみにあった細い指をすばやく俺の口元へもっていった。

そう、「しーっ！」だ。

「でも、教えませんよ。面接のことは。」

弾むような声でいう。

「なんで？」

すると美樹は、先ほどまでとは違う、ニヤリというような笑みを浮かべたが、

その笑みはすぐに消え、恐ろしいくらいのオーラを放つ真顔になった。

黒ずんだ気が、雄二の周りを通り抜けたような確かな感覚がした。

一気に鳥肌がたつ。

「これ以上深くは、首を突っ込まないほうがいい。」

別人のようなドスのきいた低音。

ゾッとした。

―・・・死神―

また沈黙が訪れる。

クーラーのきいた部屋の空気は、ひんやりと冷たい。

普段なら、涼しくて、暑い今時期にはちょうどいいが、今だけは冷たすぎるようだった。

沈黙を破ったのは、またしても美樹の明るい笑顔だった。

「今日は午後から部活なので、失礼しますね。」

声はいつもどおり、高くかわいらしい声。
さっきまでの美樹とは完全に別人だ。

美樹は椅子から腰を浮かし、ひざ上の黒いスカートを軽く翻し、出て行こうとする。

「おい！待っ・・・・。」

「これ以上の深入りは・・・・するんじゃない。」

また、さっきの声だ。
いつも敬語を使うはずの生徒の、強い物言いに俺はたじろいだ。

部屋を出て行く瞬間、美樹は横目でこちらをみた。

その目は、不気味な緑色をしていた。

FILE14：校長のメール

結局、美樹には何も聞けずじまいだった。

いつもとは明らかに違うあのテンションで、あの声での一言。

それだけで何もいえなくなった。

音楽準備室で楽譜の整理をしながら、隣の音楽室から聞こえる1年生の歌声を聴いていた。

あのあと、何も聞けなかったことを春香に報告すると、むっとした顔で言っていた。

「私が直々に聞きにいきます！どこですかしのはら高校は？」

もちろんとめた。あそこには行かないほうがいい。

楽譜をまとめて棚にしまったと同時に、携帯電話が震えた。

メールのようだ。

濃い青の携帯電話を手に取り、メールを開こうとした。

「先生！」

突然背後から声をかけられる。

「アルトパートです。音取れたのでテストよろしくお願いします。」

今、1年生は合唱の練習をしている。

ソプラノ、アルト、テノール。声変わりし切っていない男子が多いのでバスはなしだ。

ここまで合唱に力を入れている中学校も少ないだろう。

「あ・・もう出来たのか。よし、じゃあテストするぞー。」

１０人程度の女子生徒が一列に並んで、歌い始める。

「・・おっと・・そこ少し音おかしいな。もう一回そこから。」

いつもどおり指示をしていく。

指示をしながら、すこし音楽室のほうに目を向けると、すでにあと２つのパートが並んでいた。

（さっきのメールを見られるのは休み時間になりそうだな・・・。）

アルトパートを合格させ、次にテノールパート（男子）のテストに入る。

こちらは音痴が多かった。

ソプラノパートも音程がずれていた。

苦笑いをこらえながら懸命に指導していると、授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「きりーつ！れーい！」

「ありがとうございました！」

「ありがとうございました。」

授業のあとには、十分間の休憩時間がある。
生徒が全員音楽室から出て行ったのを確認して、すぐに携帯電話を手に取る。
なぜそんなにもメールを見ることを急ぐのか。
それは自分にもわからない。
ただ、今絶対に見ないとまずい気がしたのだ。
『メール』『受信ＢＯＸ』
件名なし・・・・・知らないアドレスからだった。
「んー・・・？」
しかし、本文を見ると、それが誰からのものであるかすぐに分かった。
『久しぶり、畑山先生。この間は突然誘拐したりしてすまなかったね。』
口調、文章から感じとれる雰囲気・・・・・・。
間違いなく、しのはら高校の校長からのメールだった。
『あの件については、ちゃんと考えてくれているかな？』

いきなり首を絞められたように小さくうめく。

そういえば、そんなこともあったのだ。

あの件・・・・。死んで世界を守るか、世界の崩壊を黙って見ているか・・・。

『ところで、君は前、美樹さんを呼び出したそうだね。』

美樹が報告したのだろうか・・・。

『なかなかあの子は口が堅いものでね。どうしても聞き出せないんだ。

いったい何をはなしていたんだ?』

「何?」

美樹は言っていないのか。話した内容を。

面接試験のときの記憶・・・あの高校の秘密を聞き出そうとした俺のことを・・・。

『まぁ、それはいいとして・・・・。

例の件について今の気持ちを聞かせてもらいたいんだ。』

・・・まだ、考えられていない。

『ただし、直接だ。また私の学校へ来てもらうが・・・・・。』

・・・もう、行きたくない。

『春香さんも連れておいで。』

「はぁ？」

なぜそれを知っている？

思わず携帯電話を取り落としそうになった。

『今週の日曜日１８：００・・・・・。待っているよ。』

その最後の文章の後には、『屍ノ原高校長』とあった。

「し・・の・・はら・・・・・？篠原じゃないのか・・・？」

『屍（しかばね）』。その字を見た瞬間、背筋がぞっとして、鳥肌が立った。

死神のいる高校・・・・。異世界の高校・・・・。

ただ、興味本位。俺に協力しようとしていただけの一人の少女をそんな所へ連れて行くのか。

俺は、すぐにメモ用紙に走り書きをした。

『春香』

話をしてみないといけない。
春香はきっと行くと言うだろう。
ちゃんと話さなければならない。
あの高校のことを。
それでも行きたいと春香が言うなら―・・・・・・・
連れて行く以外に出来ない。
あの校長が春香に何の用があるのかは分からない。
もしかしたら、春香が危険な目にあうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。
とりあえず、話をしないとわからない。
「聞いてみよう・・。本人の意思を・・・。」

俺は小さくつぶやいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5532d/

しのはら高校・死神委員会っ！！

2010年10月16日00時42分発行